仙台教区報

発行所 カトリック仙台司教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二二-22-七三七一番
編集・発行人　笹気直哉

新しい一歩の時
―教区付司祭団の人事異動によせて―

司教総代理　梅津明生

仙台教区は昨年九月、五十周年を盛大に祝い、教区民全体が新しい一歩を踏み出す決意を新たにしました。これを受けて邦人司祭団は、わたしたちの教区がさらに成長できるために、いま何を為すことが最も重要であるかを、月例会において討議をし考え続けてきました。

その結論の一つとして、教区事務所をさらに充実するということがあげられました。このことに関しては佐藤司教様が年頭書簡の中で詳しく書いておられます。たしかに教区事務所が単に教会や幼稚園の事務を処理するだけではなく、宣教や司牧に関しても教区本部的な役割を果たすことができるようになるならば素晴らしいことであると思います。

宣教や司牧に関して具体的に企画し、教区民の考えを聞きながらそれを推進したり、常に教区民の声を聞いて吸い上げる場があるならば、教区として今よりも進歩して行けるのではないかと思います。

仙台教区の中には多くの委員会等があり、たくさんの会議が開かれています。そこから出てくる意見や考えを整理して、教区として一つの方向性を持たせるためには、専任のスタッフが必要になってきます。しかし教区本部に専任の司祭を配置するならば、同時に小教区で働く司祭が不足するという問題が起ってきます。

このことは仙台教区にとって今後の大きな課題であり、決して避けて通ることのできない問題であるので、司祭の高令化傾向とも併せて考えて行くべきことであると思います。

幸いこの課題を仙台教区は「福音宣教推進全国会議」に提案した課題の第一に挙げており、十一月に開催される全国会議の課題としても取りあげられているので、今後小教区間の協力体制や小教区のわくを越えたあり方について、教区民の皆様が積極的な意見を出し合っていただきたいと思います。

現実をしっかりと見つめながら、少しずつでも前進していく教区であるために、皆様のご協力をお願い致します。

【仙台教区付司祭異動】　4月1日付

司教総代理　梅津明生（一関）
書記長兼司教秘書　平賀徹夫（塩釜）
教区会計　渡辺彰宏（気仙沼）
教区本部　笹気直哉（千厩）
青森・藤の園　土井文雄（司教館）
塩町教会主任　横島健二（元寺小路）
鮫教会主任　佐藤　修（塩町）
一関・千厩教会主任　渡辺昭一（鮫）
築館教会主任　板垣　勤（元寺小路）
気仙沼教会主任　三浦平三（暁星園）
塩釜教会主任　深沢守三（西仙台）
東仙台教会主任　高田徳明（亘理）
西仙台教会主任　平田　浩（白石）
元寺小路教会主任　土井勝吾（角田）
白石教会主任　児山六七男（塩町）
角田・亘理教会主任　佐々木　博（築館）
霊性研修　吉田昌民（教区会計）
ブラジル宣教　首藤正義（東仙台）

【ケベック会司祭異動】

五所川原教会主任　モリス・ラベ（管区長）
弘前教会主任　ジャン・ガブリ（五所川原）
弘前教会助任　ジャン・ルイ・ルネ（東京赤堤）
本町教会主任　ジル・デュベ（篠田）
青森本部　ジル・ランドルヴィル（弘前）
篠田教会主任　パウル・ラヴォア（一本杉）
カナダ本部　ピエール・セイエ（弘前）
一本杉教会主任　ジャン・ドニ・トランブレ（カナダ）
横浜・溝の口教会主任　レイモンド・デロシェ（本町）
管区長　マルセル・ベランジェ（溝の口）

八戸教会の聖書研究会発足

―太田道子先生を迎えて―

今秋開かれる第一回福音宣教推進全国会議に向けての意識の高まりの中で、八戸教会では、去る三月十四、十五日に、本格的な聖書研究会の第一歩が踏み出され、両日とも五十人前後の人々が太田先生の明快な旧約聖書の導入、質疑応答に聞き入った。

尚、この研究会は、五ケ年計画で、計三十一回行なわれる予定です。

（八戸教会広報部）

「テゼ」の祈りの集い

平川　タエ

「祈りは人を一致させる。」「祈ることを人は誰も妨げることができない。」「教義を越えてキリストにおいて一致できるという希望は祈りにおいてだけ可能である。」

「テゼ」の祈りの集いに参加して感じたことです。

三月十七日、午後六時から二十数名の少ない人数でしたが、聖公会の司教様、シスター一致祈禱会で共に祈った牧師さん達や信徒の方も見えました。

フランス人の二人のブラザーと共に来られた聖公会の青年のリードで、始めに歌の練習、ついで、フランスの「テゼ」共同体のことを紹介するスライド上映。

その後、信徒館の右側の隅に準備された十字架のイコンとたくさんのローソクの前に座って、先に練習した歌を歌いました。その美しいメロディに心は解き放たれ、そのうちにひとつに統合されていくのを感じます。そのうち自然に消えて静かになり、時々心から捧げる短い祈り、世界中の人々の願いがこめられているような祈りが自由に参加者の中からほとばしります。

この時にいただいた「生命の泉」（テゼ共同体の創立者ブラザー・ロジエ の便り）の中に次の一文を見つけました。

「現代ますます重要になってきた、信徒による福音宣教の第一歩は、いかにして他者に寄り添ったらいいのかを学ぶこと。耳を傾けること。それは「――にしなさい。」と型にはまった命令をするためのものではなく、その人の中で、神が用意してくださったものが何であるかをその人自身が発見するのを手伝うこと。」　大いに共鳴します。

超教派の和解、国と国との和解、職場での和解、家庭の和解、隣人との和解、自分自身との和解は、「共に祈る」ことにおいて実現できるという希望が湧いてきます。

心を静め集中させる神秘的なローソクの光、床に座る、賛美、感謝、嘆願などをくり返す。美しいメロディ。私たち東洋人にもぴったりの祈り方と思います。主はご自分の方から、私たちの交わりの中に入ってこられたようです。

司教様の日程（5月20日現在）

5月17日～6月3日　カリタス国際会議
6月6日　学校法人理事会・評議員会（仙台）
8～13日　司教会議（東京）
15日　宗法責任役員会
17～18日　児童福祉施設全国会議（大阪）
19～20日　医療施設協議会（名古屋）
20日　NICE代表者の集い（仙台）
25日　中央協機構改革特別委（東京）
26日　ヴァチカン展オープニング（仙台）
27日　カリタス・ジャパン（東京）
28日　聖ペトロ・パウロ祭日（元寺小路）
29～30日　教区司祭団月例会（仙台）
7月5日　宮城県信徒大会（仙台）

〔第1回 福音宣教推進全国会議 課題〕

- 開かれた教会づくり
  - 日本の社会とともに歩む教会
    - 人々と苦しみを分ち合うには
    - 社会の良心となるには
    - 新しい社会をつくるには
  - 生活を通して育てられる信仰
    - 職場で信仰を生きるには
    - 家庭で信仰を生きるには
    - 青少年が信仰を生きるには
  - 福音宣教をする小教区
    - 地域に開かれるには
    - 信徒と司祭でつくるには
    - 小教区の壁を越えるには

仙台領内キリシタン史(2)
日本キリシタン史の経緯

Sr猪岡　庫

政宗は一六一〇年に江戸でその側室の重病をいやしてもらったのが機縁で、フランシスコ会の施療院の院長ソテロを知った。二人を引き合わせたのは後藤寿庵であったといわれている。ソテロは謝礼としてさし出された金銀を固辞し、ただ仙台領内での布教の許可を求め、政宗はこれを快諾した。

翌一六一一年、仙台に赴いたソテロは数名の随行者と共に政宗の城で手厚くもてなされ、政宗をはじめ居並ぶ重臣を前にキリシタンの教義を説き、一同に深い感銘を与えた。政宗は彼等を保護し布教活動を正式に許可し、同年11月23日、仙台城内に「デウスの教えを領内に弘めることを許す。望む者はキリシタンになることを得」という高札をかかげた。ソテロは仙台城下と、城下の近くに二つの教会を建て、布教活動に専念した。政宗自身も入信したいが諸般の事情で今はできないと語ったという。ソテロは政宗を有望な洗礼志願者かつ教会の保護者として、いたるところで紹介している。政宗が後日、支倉六右衛門に託してローマ教皇に奉呈した書簡中にも、自分は真心から洗礼を望んでおり、領民たちも皆キリシタンになるように勧めたいので、多くの宣教師を派遣してほしいと述べている。果たしてそれが政宗の本心であったかどうかは、後の彼の言動から推して、きわめて疑わしい。

政宗の望みは、ただ宣教師の力を借りて外国と交易したいということであったと見るのが妥当であろう。

徳川家康も最初からキリスト教には好意的ではなかったが、フィリピン、メキシコ、スペイン等との交易を切望しており、そのために宣教師を利用しようとしていた。スペイン人宣教師ソテロは、この二人の望みに応え、彼もまたこの二人の力を借りて、教勢の発展をはかろうとしたのである。このようにそれぞれの思わくの中であの有名な遣欧使節の企てがなされたのであった。幕府がはじめてキリシタン禁教令を発した翌年に、政宗の使節支倉が月の浦港を出帆したのだが、それは秘かに出かけたのでも、幕府の意に反して出かけたのでもない。政宗が牡鹿半島で堂々と大型船を作らせた時、幕府はそのための専門家の大工たちをわざわざ江戸から遣わしたのである。そしてその船に乗った一八〇人位のうち、一四〇名ほどが日本人で、その中には勿論支倉をはじめ政宗に仕える侍達がいたが、その他に伊丹宗味のような貿易商人たちや、幕府の船奉行向井将監の家来たちがいた。更に四〇名位の外人の中には、この使節一行の中心人物ソテロの他に、スペイン大使の名目で来日していたビスカイノがおり、その他は大体スペイン人の船乗りと、フィリピンやメキシコの原住民たちという不思議な乗り合わせであった。この遣欧使節については次回に詳述したい。

仙台白百合短大に英語科が新設

仙台白百合短期大学に、県内の短大としては初めて英語科が設置された。四月四日には英語科新設と校舎・講堂の落成を祝う記念式典と祝賀会が、宮城県知事、泉市長、佐藤司教他、多数の参列のもと盛大に行なわれた。

同短大は、昭和四十一年創立以来、キリスト教精神を基本に、家政科だけの女子短大として歩んできたが、創立二十一年目にあたり、また第二次ベビーブームの十八才を迎える契機に新たに英語科を増設した。国際的視野を持ち、英語を駆使できる人材の育成をめざしたものである。

新設英語科には、語学・文学の二コースを設けているが、いずれも「話す」「聞く」「書く」という英語の運用能力の活用に力を入れる。また、二年次には夏期休暇を利用してイギリスへの研修制度（約一ケ月間）を取り入れるほか、短大卒業後、東京の白百合女子大学文学科三年に編入の道も開かれている。この他、秘書教育のカリキュラムが組まれているのも魅力の一つであろう。

今回新設された校舎（主に語学教室・研究室）、講堂、体育館と構内の整備によって、一応同短大ではキャンパスの整理も終ったとし、桜花らんまんの校庭など教会関係の方の利用にも…ということである。

聖体奉仕
一年目を迎えて

青山　里恵子

元寺小路教会で私ども女性四名を含む九名が、司教様から聖体の特別奉仕者に任命されはや一年が経ちました。

昨年の復活祭に候補者として祭壇に登ることを促され、主任司祭からの推薦と任命を願う言上があり司教様は参会者に賛同を求められての荘重な任命式でございました。昔は内陣に入ることさえ憚られた女性の身にとって、息を呑むばかりの感動をもって受け止めたことは申上げる迄もないことでございます。この奉仕活動は、司教様の涵様な育成方針に加えて主任司祭よりの懇切な指導と、シスターはじめ信徒の方々の温かな思遣とに見守られながら無事二度目の復活祭を迎えることができ誠に感慨無量でございます。

私ども戦前戦中派には「男女七歳にして席を同じゅうせず」との儒教的思想が社会通念となって残存しており、大方の日本人が受け入れている仏教の経典では「三千世界の男の煩悩をすべて集めたものが一人の女性の業に等しい」などと説き、まさに男尊女卑もここに極まるといった思潮が世の底流にあったのです。働く女性が男女同権を押し出そうものなら、たちまち世のひんしゅくを買ったのも原因はこの辺にあったのでしょう。

最近漸く男女雇用機会均等法が施行され、遅ればせながら同一労働同一賃金による男女平等の権利が確立されました。この背景には一九四八年の世界人権宣言、つまり「すべての人は――中略――いかなる種類の差別も受けることなしに、すべての権利と自由を享受する権利を有する」にあることは明らかです。

さて日本のカトリック教会では、男性には不用なベールで頭を覆うことを今に至るまで大凡の女性が忠実に守っていることを除けば、ミサ中の第一、第二朗読は言うに及ばず先唱や侍者に女性が当ることも特に珍らしいことではなく、教会における男女差別を声高に叫んで教会を去ったシモーヌ・ド・ボーヴォワール（フランス女性小説家・思想家・サルトルを信奉する実存主義哲学者）の気炎をそがんばかりの変ぼうぶりとなっています。

この聖体の特別奉仕の大任も、主任司祭による密度の濃い勉強を続けは致しましたものの極く普通の女性信徒にも与えられ、ただ身を低くして謙遜に拝受した私どもでしたが、実際奉仕の場に立ったとき、司祭対信徒といった関係とはまた異なり、同じ仲間としての分ち合いの聖体の授受であって当初危ぐしていた異和感など意識することもないほど、どの拝領者の顔にも親近感が漂い「ご聖体に触れるかたじけなさ」に震えんばかりの奉仕者を却って力づけ励まして下さっているようでした。何より大きな収穫はお年寄りや病床の方に、喜こびや安らぎ、そして苦しみに耐えながら生きるための支えとなるご聖体を、聖務多端な神父様を煩わすことなくお届けでき、わけても女性の方には同性ゆえ身繕いなどの気兼もなく、信者同志の気安さで話相手となり、病苦の悩みまでも分ちあうことができます。このことは既に司教様のご計画に入っていたことでしょうが、信徒に与えられた使徒職への拡がりを想い、派遣の使命をさえ強く感じております。

教令では更に司牧上の仕事を信徒に委任することが勧められている由でございますが、司教様から託された言葉と交わりの祭儀のための聖書と、ご聖体の籠るチボリームの重さとを身にひしひしと感じながら祭祀への積極的参加に意欲を燃やし期限の日まで一意精進する覚悟でございます。

私ども奉仕者が神様のお恵みに支えられ、神と教会の食卓の奉仕にふさわしい者となることができますよう特に女性の皆様のお祈りをお願いするものでございます。

【編集後記】　司教様から「教区報をやって下さい。」といわれて、「ハイ」と気軽に言ってしまった自分を今さら悔んでも仕方がないのですが、これから毎月教区報に追われるかと思うと、目の前が真暗になってしまいました。仕様がないから、開き直って暗闇人生を歩いていこうと思います。でも、もしかするとそんな姿を誰かがあわれんで、毎月いろんな記事や写真を教区事務所に送って下さる方が現われて、一条の光となっていくかも知れないと、淡い期待をいだいている今日この頃でございます。今後ヨロシク。（笹）